
あなたと過ごした日々

三浦みほ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたと過ごした日々

【Nコード】

N8865T

【作者名】

三浦みほ

【あらすじ】

他の誰かを好きになったとしても、

あなたはずっと特別で…

裕くんと出会ったのは
ちょうど4年前の春。
あたしが小学4年生の頃。

まだ転校して来て
色々分らないあたしに
色んな所を案内してくれたね。

「ここが一番夜星が綺麗」

「ここが一番俺の落ち着く場所」

「ここが一番授業サボっても見つからない場所」

なんでも教えてくれた。

良く授業サボって
秘密の場所で遊んでたっけ？
仲間も居れば2人の時もあつた。

実際2人の時
最初はめっちゃドキドキしてた。
てゆかいっもかな？笑

だって
大好きだったから。

あたしが小5の夏。

裕くんはあたしに言った

「俺、お前の事好きだ。
ずっと守ってく。
ずっと隣に居る。

お前は俺の隣りに居てくれるか？」

こんなこと。

あたしビツクリしたんだよ？
てゆか困っちゃったよ。

だってこんなあたし好きになるなんて
頭いかれてるんじゃないか？って笑

あたしは泣きながら

「当たり前だよ…。」

って言ったと思う。

そうそう

裕くんは1つ年上だった。
小学生男児にしては
かなり大人だなって思ってたよ。

裕くんの卒業式。

あたし1人かなり泣いてたよね。
ああゆうのを

馬鹿無き

ってゆうのかね？笑
それくらい泣いてた。

大好きな人と

毎日一緒の空間に

居れなくなる

って思ったら

なんだか涙

止まらなかったんだよ。

打ち上げ。

楽しかったね。

みんなから改めて

「お幸せに」って

祝福されたね。

お兄ちゃんには感謝しなきゃ。

だってお兄ちゃんが居なきゃ

あたし達こうなってなかったかも…。

たくさん

笑って笑って

泣いて泣いて

色んな思い出詰まったあの学校。

離れるのはどんなに辛い

あたしも後々知ったよ。

あたしが小6の冬。

修学旅行の前日。

裕くん寂しくなったの？

会って遊んだね。

しかも公園。

本当は

結構寒かったんだよ。

でも一緒に居たいから

じっと我慢した。

そんな中

裕くんが言ってくれた

「ごめんな。

こんな俺で。

お前の事守るとか言っ

全然守れてねえし。

最低だな。

本当ごめん。」

そう。

あたしはこの頃

ある一部の女子から

虐めを受けていた。

その事をあたしは

裕くんには言わなかった、

言えなかった。

だって心配掛けなくなかったから。

後で色々聞いてったら

劉己（友達）が言ってたみたいだね。

「ううん、全然大丈夫。

あたしは裕くんが居ないと、

裕くんじゃないと駄目なの。

どんな裕くんでも、裕くんがいいの。

それに虐めてくるの一部だし

周りにも守ってくれる友達いっぱい居るからあ！

だから心配しないで？」

ってあたし言った気がする。

今もそう思う。

修学旅行かなり楽しかったよ。

前日裕くんと会ったからかな？

あたしの卒業式。

そして仲間との別れ。

裕くん卒業式来てくれたね。

またいっぱいたくさん泣いちゃった。

みんなで最後の思い出

いっぱい作った。

一生、ずっと忘れ無い思い出。

あたしは小6の春休みに東京に引っ越した。

見送りに来てくれた最高の仲間、
それと裕くん。

車追っかけながら

「俺はずっとお前が好きだー!!」

って叫んでたの
ちゃんと聞こえてたよ。

「あたしも!!好き、ずっと大好きっ!!!!」

って言ったの聞こえてた?
頑張っって叫んだんだよ。

その後

裕くんとは文通してたね。
あたしは携帯持ってたけど

裕くん持つてなかったから。

あたしが中1の春休み。

あたしの誕生日、3月29日。

久々に会いたいし
じゃあ誕生日近いから
誕生日に会おうってなったんだったね。

待ち合わせ時間
10時。

待ち合わせ場所
母校の小学校。

9時50分。

あたしが待ち合わせ場所に到着。

待ち合わせ場所には
桜がいっぱい咲いてて
鉄棒があった。

あたしは鉄棒に座りながら

裕くんを待ってた。

10時05分。

「みほーっ!!」

愛しい声が聞こえてきた。

緑色のフェンスの奥に
愛しい人の姿が見える。

「ゆーくーんっ!!」

満面の笑みで手を振りながらあたしは言った。

裕くんは信号のある横断歩道を渡らず
ガードレールを超えて車道に出た。

右左も見ず

走ってこっちにやって来ようと

一步を踏み出した時

ドンッ

グシャ

「ゆう……くん？……」

裕くんはトラックが通った瞬間
消えていなくなった。

探した。

ちよつと前方の下を見た。

え……？

血まみれで倒れている人が居る。

まさか……

良く目をじつと凝らして見てみた。

ゆう・・・や・・・。

倒れていたのは紛れも無くあたしの愛しい人
そう、裕くんだった。

あ、あ、あ、あ、

あああああああつ!!!!!!!!!!

「あ」としか言えなかった。
血の気が一気に引いていった。

あたしはちょっと叫びながらうつろった後
裕くんの元へ走った。

「ゆう……くん？」

大丈夫？

ああ、

裕くん、裕くん……！」

不安でいっぱいになった。

涙が溢れて止まらない。

「だ、誰かつ！！

誰か助けてえ！！

誰かぁ！！」

助けを呼ぶが

こういう時に限って

誰も通らない。

車一台さえ通らない。

最悪な村だ

と、あの時初めて思った。

ざっと2時間くらいたったであろうか…

あたしは携帯を取り出し

やっこの思いで震える手を抑えながらも

必死に救急車を呼んだ。

救急車は約30分程度で来た。

裕くんはとある病院へ運ばれた。

病院に着いてから

あたしと裕くんについて
色々聞かれその後看護師さんが
裕くんの家族へ電話を入れてくれた。

手術中のランプが点いた。

裕くんの家族が
病院に来た。

手術中のランプが消えた。

医者が出てきた。

「あ、あのっ！
ゆうくんは！！？
ゆうくんは大丈夫なんですか？」

あたしは医者に聞いた。

「最善を尽くしましたが…
残念です。」

は・・・？

「っ、つまり
どーゆーことですか!？」

あたしは医者に迫った。

「つまり、
お亡くなりになられた
とゆーことです。」

え・・・？

「な、亡くなった・・・？

な、なんでえ！！

なんで死ぬの！！？

なんで、なんでえ！！？」

あたしは医者に泣きすがりながら聞いた。

「お、落ち着いてください！！

こーゆーこともあるんです！

それに、あなたがもうちょっと早く
通報してくれたら

助かったかもしれないんです。

それをお忘れなく。」

それを言い残し

医者は裕くんの家族の元へ行った。

あたしはその場で泣き崩れた。

そして自分を責めて責めて

責めまくった。

翌日。

裕くんのお母さんが
あたしの家にやってきた。

「あ、こんにちは。

どーしたの？お母さん。」

「あのね、看護師さんが

これ、裕也のズボンのポケットに入ってたって」

と、裕くんのお母さんが
ぐしゃぐしゃに潰れてる

手のひらサイズの箱を差し出してきた。

「え？

なに？・・・これ」

と、言いながらあたしは
その箱を開けてみた。

あっ

うつ・・・。

中身は指輪だった。

「ああ、うううう、
ばかぁ・・・。」

涙がまた

溢れて止まらない。

あたしは数日間学校を休んだ。

だけど学校の友達や先輩が
心配してくれてて
あんまり心配かけすぎるのも良くない
と思い、行き始めた。

1年後。

あたしは中学3年生。
4月。

連絡が全くつかなくなった

裕くんのお母さんから手紙が来た。

『みほへ。

裕也の机から

裕也からみほへの手紙があつたので

同封してきます。

裕也の母。』

もう一枚の手紙を見てみた。

『みほへ。

これを読んでるって事は俺は死んだのか…。

なんか、一応こーゆーの書いといった方がいーと思って
書いてみた笑

なあ…？

みほ？

俺は居なくなっちまったけど
ずっと隣りに居るからな。

あの時約束したろ？

ずっと隣りに居るって。

だからもお泣くな。

みほが泣いてたら、俺も悲しい。

けどみほが笑ってたら、俺も笑えるんだ。

そのことぜってえー忘れるな。

後、もし他に好きな人が出来たとしても

別に俺はなんとも思わねえから。

みほのすきな様に生きる。

俺はみほをずっと応援してる。

どんなことがあっても

俺はお前を、みほを守り続ける。

それから、

ずっと愛してる。

三浦裕也』

「ゆう・・・やあっ・・・」

涙が止まらなかった。

あたしは医者に言われたあの

「あなたがもつと早く通報してくれば助かった」

とゆー言葉ですつと自分を責め続けてきた。

この手紙のお陰で
少し救われた気がした。

何よりも裕くんと
まだまだ？がつている感じがして
凄く嬉しかった。

ねえ・・・

裕くん？

あたしは裕くんの事が今も

大好きです。

例えこの先結婚するくらい

好きな人が現れても

裕くんだけは特別です。

たくさんの事を教えてくれて

ありがとう。

これからも、

愛してます。

三浦みほ

（後書き）

これは実話を元にした
フィクションです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8865t/>

あなたと過ごした日々

2011年10月6日09時50分発行